

序

今回のレジデントノート増刊の企画ならびに編集のお話を2011年5月に藤田保健衛生大学総合救急内科の山中克郎先生からいただきました。弱冠6年目医師の私が担ってよい仕事なのか疑問でしたが、依頼された仕事は断らないことが私の信念であり引き受けさせていただきました。

今回の企画は、1年目研修医に必要な基本を学ぶことができ、かつ、少し経験を積んでから読んでもさまざまな場面で活かせるような知恵やコツがつかめる、“まずこの1冊があれば心強い”と思ってもらえるような内容にすることを目指し、山中克郎先生のご指導のもと、進めて参りました。

類書はたくさんありますが、『よくある主訴について、どのように疾患を鑑別していくか』をテーマに、救急外来や内科外来でよく遭遇する主訴を中心に各項目を構成し、以下の2点に重点を置き、担当の先生方に執筆を依頼いたしました。

1. キーワードからの展開（病歴聴取（医療面接）・的を絞った身体所見・検査）

重要キーワードから疾患を展開していくやり方は、若手医師の診断能力向上に重要と考えます。

忙しい外来ではゆっくりと診察している時間はないと思います。大切な身体所見を中心に取りに行く（focused physical examination）トレーニングが重要です。病歴聴取（医療面接）からある程度疾患が想定されていないとfocused physical examinationはできません。病歴聴取や的を絞った身体所見から鑑別疾患を想起することも大事です。

※もちろん頭からつま先までの身体所見を愚直にとることも重要です。

2. バイタルサインへの着目

診察で大事なことは重要な疾患を見逃さないことです。バイタルサインの変化にも注意することが大事です。

今回執筆いただいた先生方は、いずれも5年間の医師人生で私に影響を与えてくださった方々ばかりで、臨床能力はもちろん人間的にも素晴らしい方々です。企画はともあれ、1つ1つの項目には多くのエッセンスがちりばめられております。臨床で困ったとき、空き時間などにこの本を手にとっていただき、皆様の臨床に少しでも役立つことができれば幸いです。

企画の段階から至らない私をサポートしていただいた、羊土社編集部の保坂早苗様、深川正悟様、藤田保健衛生大学総合救急内科の山中克郎先生に心から御礼申し上げます。また、お忙しい臨床のなか、私の無理矢理な要望にもかかわらず各項目の執筆を担当して下さった諸先生方に深く感謝致します。

2012年2月

編者を代表して
諏訪中央病院内科
蓑田正祐